

大岩戸関の引退特別展

25日(日)まで、東田川文化記念館で 17日に引退パーティ、鶴岡市スポーツ特別賞贈呈

藤島地域出身の大相撲・大岩戸関（上林義之）の引退特別展が15日（木）から25日（日）まで、東田川文化記念館で展示されています。

場所をもつて引退された。上林義之さんは、加茂水産高校から近畿大学に進み、4年生で学生横綱となり、2004（平16）年に大相撲

八角部屋に入門。同年3月場所で初土俵を踏み、以来85場所、15年に亘る力士生活でした。2005（平17）年5月場所です。新十両、13（平25）年3月場所です。新入幕、17（平29）年の5月場所では幕下全勝優勝を遂げました。



→28代木村庄之助（鶴岡市出身）書

大岩戸関後援会の解散総会と引退パーティが17日（土）、藤島地区活動センターで開かれ、後援会関係者ら約100人が出席しました。会場では、皆川治市長から鶴岡市スポーツ特別賞が上林義之氏に贈られました。

暮秋有感

霜降節過対残秋
次第増寒覚淡愁
白髪加年吾亦老
緋書諷誦独忘憂

暮秋 感有り

霜降 節 過ぎて 残秋に 対す
次第に 寒を増し 淡愁を 覚える
白髪 年を加て 吾も 亦 老ゆ
書を 緋き諷誦して 独り憂いを忘れる

城貞（藤の花）

短歌 老いければ

老いければ 歌会の友に 支えられ

生き行く道を ほのぼの思う

佐久間さかへ（添川）

霜降の季節も過ぎて、秋もおわりになる。寒さが増してもさびしく、心のうきためぬ気持ちになった。白髪となり歳をとって、季節と同じに、私も又老いた。（秋の夜長は）書物をよみ詩文などを暗誦したりして、心配ごとや嘆き悲しみごとを、忘れるとしよう。

諷誦||詩文などを暗誦する

【絵を描く】最終回 月山(2)心のふるさと月山

加藤貞雄（山王町／上平形出身）

小学生のころ、渡前小学校まで4キロほどの道のりを月山を眺めながら通った。

月山は富士山のような「我独り」の姿ではなく、連峰の山々と相俟ってなだらかな稜線を描いてどっしりと構えている様子だ。

冬、北西からの風雪を全身に受けて立つ厳しい姿。新緑の装いを広げながら山麓を登っていく春の優しい姿。その雪解けの水が庄内平野を潤し、青々とした水田を広げ、美味しい米を育む豊饒の月山。彫刻刀で彫ったように山肌に濃い陰影を刻む夏の月山。紅葉で全山が燃え立つ秋の月山。その厳しさと優しさ、美しさ、豊かさに月山の品格がある。

夕日を浴びて真っ赤に染まる月山が、次第に紫に暮れなじむ光景を見ていると言葉を失う。絵に描こうにも描けず自分の非力を思い知らされる。

夜遅く暗い空の中、月の光を受けて青白く浮きあがった月山を見た時、その神秘的な姿

に、これは夢の世界ではないか、「神々しい」という言葉はその月山の姿のためにあるのではないか、ときえ思えた。

赤川の羽黒橋から眺めると、月山の8合目から頂上まで4つの小さな瘤が見える。若いころ、その瘤（大きな岩）に跨って眼下に広がる庄内平野を描こうとしたが、足元は絶壁で、下から吹き上げてくる強い風で体が煽られ、不安になってスケッチどころか絶景を眺める暇もなく引き返した（夢ではない）。

“羽黒橋から眺める月山の姿が最高だ”と言うと、いや”朝日地域からが最高だ”、いや、藤島からだ”、いや、黒川橋からだ”と譲らない。どこでも「おらほの月山」だ。月山をずいぶん描いたが、納得できる絵はない。

月山をじーと見つめていると、「それいいのか」と問われているような気がしてならない。



紅葉で燃える北月山

中山道テクテク1人旅 29 旅の終わりに 京都三条大橋へ

新町 齋藤留治

東京から歩いて25日目、東海道と中山道が交わる草津の宿場町から京都三条大橋に向けてこの旅最後となる一日を歩きました。

なにせこの辺は交通量が多く、のんびりと眺めながら歩くと車に跳ねられ一卷の終わり、というような感じもしながら歩いた。

毎年TVで見える琵琶湖毎日マラソンで有名な「瀬田の唐橋」(京の宇治橋、山崎橋と共に天下三名橋と言われた。)を渡り、滋賀県の大津市街に入っていた。

渡った瀬田の唐橋についての記憶は無くなっているのですが、車の騒音ばかりが頭に残り、日本橋と同じように昔の風情どころではなくなってしまったのかも(私は京都嵐山の渡月橋の方がよほど名橋だと思うが)。瀬田の唐橋を後にして、昔の山城国(京都府の南側付近)と近江国(滋賀県)の国境になつていた逢坂の関を越えて、京都へ向かう道は延々と続く上り坂。午後3時に三条大橋で待っているという友人達に会う楽しみばかりではなく、遅れてはならないという焦りでも無理に急いで歩いたために、足は棒のように動かなくなっていました。

座る場所を見つけては何度もドッコイショと座り込んでしまう有

様であった。

東京からの途中、多くの峠道を越えてきたが、「こんなに苦しい登りは無かったかな」と愚痴をこぼしながら登って峠を越えると、すぐ目の前に京都の街が広がっていた。

それからは緩やかな下りが続き、急げ急げとばかりに目標の三条大橋へ一目散で駆け下りたような気がする。

橋の上では、待っていた友人2人が公衆の面前なのに拍手喝采で迎えてくれたので、周りの人達は何かと見ていた。

出迎えた友人の一人は関西に住んでいるが、もう一人の方は東京からワザワザ(私を出汗にしている観光目的かも)来てくれたという日本航空の女性乗務員。

2人とは、オーストラリアのブリスベーンで知り合いになって飲んだり食ったりした中で、私が帰国後も時々東京で会ったりしていた。

三条大橋の袂にある弥次さん喜多さんの像の前でパチリの後、私の為に準備しておいたという和食店での物語は、私にとつて忘れ難い土産でもあったかな。そんな思い出で、私のテクテクの長い旅は終わった。(終り)



藤島歴史公園【Hisu花】に
来年4月、オープンカフェ設置へ

藤島庁舎では、歴史公園の魅力向上を目的に、飲食等の店舗営業を公募し、応募のあった1業者の決定を19日公表しました。店舗はチーズケーキ等でファンの多い「いずみや」で、来年4月オープンを予定しています。(写真・市HP)

だまされては遺憾!

異常な日本軍の軍事思想

青山崇

第1は、異常で異常な日本軍の軍事思想である。

1つは短期決戦である。長期戦を戦い抜く経済力、資源などの国力をもっていないというところから、「短期決戦」を重視する作戦軍事思

想である。

複数国との長期持久戦が必死の時代にもかかわらず、単一国に対する短期決戦という現実とはかけ離れた基本方針である。

第2は、戦闘をすべてのことより優先させ、

補給、衛生、海上護衛などを軽んずる戦闘至上主義である。

必要な生活物資、特に食糧を後方から補給しないで、「現地徴発」を基本としたのである。

「徴発」といつてもお金を支払はないことが多かったことから、実際は民衆からの略奪であった。

その様子は、映画・テレビなどの作られた映像でも数多く見ている。

ある軍医は、作戦地に向かう行軍の状況を



次の選挙で大敗を

めんどり(雌鶏)が刻を告げる・と言つて日本では嫌われるが、言い寄つて手でも掴んだものもあるまいが、嫌われたもので要職にある者が首になった。これが、大統領夫人の声からだとの報道だ。

▲世界中でもぶつかり合っているアメリカファーストは、これまで何人かの首を据え変えてきたが、独断が響いてか先日の中選挙では大敗を喫つたようだ。この一件の後、たつたらどうなつていたろうか・ナンテ思うが。

▲さて、日本のなんでも出来る人が、タフだ。よくもこんなに外国に行けるもんだと思いませんか。その合間に国会に出ている感じだ。解決は私が・と言いなから、国民にどんなに反対が多かろうと、ウソ・改ざん・隠ぺいま

記している。

それは、以前に2つの軍団が通過した後という状況であるが、「宿営地にやつと着いても、それから疲れた足を引きずつて3、4キロも奥地の部落へ食糧を探しに出かけなければならず、獲物も少なかった。

来る日も来る日もわずかの食糧を漁り歩く姿は、落ちぶれた夜盗か喪家(そうか・帰るべき家を失つ)の犬と変わりが無い」と書き、情けなさに涙がでたという。

で駆使するが、相手が外国となると当り前の事も言えないのだ。

▲拉致問題は少しは良い方向へ進んでいるんでしょねー。貿易の進め方では、一緒に記者会見し、全て一致したと言いながら、話していることが同じでないんだぜ。思っているようなことに進むのかい。いらぬ高い兵器は、断して断れよ。

▲今週に入って、そんな病気が長いこと出ていないからト力危険な部位を除けばト力で、肉牛の年齢は米国が言っていたものを許すことになるようですヨ。▲これで独立国と言えるか・と言われる日米地位協定は、「変えようよ」とは言い出せない。悔しいが、米軍が起こした国内の事件・犯罪に警察が入れないんだぜ。消費税も上げるこんな政権は、次の選挙で大敗を喰わせなくっちゃ。(石川)